

『訓蒙図彙』寛文版本と  
『本草綱目』承応・万治系統版本  
— 図像の分析から —

楊 世瑾

The Kanbun Version of *Kinmozui* and the Joou and  
Mangji Versions of *Bencaogangmu*:  
From the Viewpoint of Illustrations

YANG Shijin

摘要

《訓蒙図彙》成立于江戸时期，是日本第一部图解百科事典，《訓蒙図彙》的图像被德国博物学家肯贝尔所著《日本志》，以及寺岛良安编纂的《和汉三才图会》大量引用，对后世影响巨大。

在关于《訓蒙図彙》初版寛文版本的图像的先行研究中，上野益三和胜又基指出了《本草綱目》对其的影响。本论文在前人研究的基础上，进一步考察《訓蒙図彙》寛文版本的图像与《本草綱目》的关系。通过将《訓蒙図彙》与《本草綱目》不同版本的图像进行比较分析，试图阐明《訓蒙図彙》所参考的《本草綱目》的版本。

キーワード：訓蒙図彙 百科事典 図像 本草綱目

## 目次

- 一、『訓蒙図彙』①寛文版本「凡例」における図像
- 二、『本草綱目』和刻本の図像の二系統
- 三、『訓蒙図彙』①寛文版本が参看した『本草綱目』版本の系統  
むすび

### 一、『訓蒙図彙』①寛文版本「凡例」における図像

寛文六年（一六六六）に刊行された、中村惕斎（寛永六〈一六二九〉～元禄十五〈一七〇二〉）撰『訓蒙図彙』二〇巻（初版）は、日本最初の絵入り百科事典である<sup>1)</sup>。本書は「天文」以下十七部から成り、一四八四項目を収録し、各項目にはそれぞれ一図を配して一四八四の図像を収載する。また、各項目に短い解説を付す。ただし、解説を付けない場合もある。

本書は初版刊行後、増補改訂版刊行された。伝存する『訓蒙図彙』の主要な版本は、次の三種類がある<sup>2)</sup>。

- ①寛文六年（一六六六）刊、初版『訓蒙図彙』二〇巻
- ②元禄八年（一六九五）刊、増補版『頭書増補訓蒙図彙』二一卷
- ③寛政元年（一七八九）刊、増補版『頭書増補訓蒙図彙大成』二一卷

別稿では、『訓蒙図彙』初版である①寛文版本を取り上げ、その本文が、明・万曆二四年（一五九六）刊、李時珍撰『本草綱目』五二巻に見える異名・梵名、独自異文を摂取していることを指摘し、『訓蒙図彙』①寛文版本の本文が、『本草綱目』の本文を引用した可能性を論じた<sup>3)</sup>。そこで、本稿では、図像に着目して、『訓蒙図彙』①寛文版本と『本草綱目』の関係を考察したい。

『訓蒙図彙』①寛文版本の図像は、享保十二年（一七二七）刊 E・ケンペル撰『日本誌』<sup>4)</sup>、正徳二年（一七一二）の「自序」、同三年林鳳岡ほかの「序」をもつ寺島良安撰『和漢三才図会』に多数引用されるなど、後世に多大な影響を与えた。

では『訓蒙図彙』①寛文版本の図像は、どのようにして成立したのである  
うか。

『訓蒙図彙』「凡例」は諸本によって若干の異同があるが、①寛文版本の「凡  
例」は、図像について次のように述べている。

諸一品ノ形ノ状、並ニ茲ノ邦ノ風ノ俗土ノ産ニ矣。凡所ノ目ノ撃スル  
者ハ、便筆シテ而摹スレ之ヲ。或ハ抛リニ画ノ家ノ所ニレ写、或ハ審ニ問ヒニ識  
者ニ、然シテ後命シテ工ニ描ニ成ス之ヲ。其ノ間ニ、有トキハ本土ノ所レ  
無キ及ビ有無未ルコトニレ審ニセ、則並ニ以ニ異ノ邦ノ風ノ物ヲ補レ之ヲ<sup>5)</sup>。

（諸品の形状、並に茲の邦の風俗土産に象る。凡そ目撃する所の者は、  
便ち筆して之を摹す。或いは画家の写す所に抛り、或いは審かに識る者  
に問ひ、然して後に工に命じて之を描成す。其の間に、本土の無き所及  
び有無未だ審かにせざるに有るときは、則ち並に異邦の風物を以て之  
を補ふ。）

これによれば、①寛文版本の図像は、基本的には惕斎自身が直接見聞した  
ものを写したものであり、このほか、画家の写した絵に依拠したり、識者に  
尋ねたことを画工に描かせたものである。さらに、日本本土にないものや有  
無が明らかでないものは、主に中国等の「異邦の風物」によって補ったとい  
う。

ではこれら①寛文版本の図像は、どのような典籍に依拠したのであろうか。  
『訓蒙図彙』①寛文版本「凡例」は、引用書目について次のように述べて  
いる。

引ニ證ノ之図ノ書、漢ノ字ハ以ニ三ノ才ノ図ノ会農ノ政ノ全ノ書及ビ諸ノ  
家ノ本ノ草ノ之図ノ説ヲ為レ主ト、凡訓ノ詰注ノ疏稗ノ史雜ノ編ノ中、  
有トキハ明ノ徵ニ、則採ニ摭シテ以裨ニ益ス矣。国ノ書ハ、以ニ源ノ氏ヲ和ノ  
名ノ集ヲ為シレ本ト、以ニ林ノ氏ヲ多ノ識ノ編ヲ繼レ之ニ。凡類ノ編ノ雜ノ  
抄如キニ字ノ鏡壺ノ囊下ノ学節ノ用ノ之等ノ、並ニ參レ之ニ補レ之ヲ。

（引證の図書、漢字は『三才図会』『農政全書』及び諸家の本草の図説を  
以て主と為し、凡そ訓詁・注疏・稗史・雜編の中、明徴有るときは、則

ち採摭して以て裨益す。国書は、源氏が『和名集』を以て本と為し、林氏が『多識編』を以て之に継ぐ。凡そ類編、雑抄は『字鏡』『<sup>マ</sup>壘囊』『下学』『節用』等の如き、並びに之に参へ、之を補ふ。）

「凡例」で『訓蒙図彙』撰者・中村惕斎が自らあげた漢籍・和書の引用書目は、次のとおりである。

漢籍：『三才図会』・『農政全書』・「諸家本草之図説」

和書：「源氏和名集」(『和名類聚抄』)・「林氏多識編」(『多識編』)・「字鏡」(『字鏡集』)・「<sup>マ</sup>壘囊」(『壘囊鈔』)・「下学」(『下学集』)・「節用」(『節用集』)

『訓蒙図彙』が引用する漢籍のうち、図像を載せるものは、次の三種である。

明・万曆三十七年（一六〇九）刊、王圻・王思義撰『三才図会』一〇六卷  
明・崇禎十二年（一六三九）刊、徐光啓撰『農政全書』六〇卷

「諸家の本草の図説」

これら漢籍のうち、『三才図会』の図像が『訓蒙図彙』巻四「人物」の図像に与えた影響については、杉本つとむ氏、勝又基氏の指摘がある。杉本氏は、『訓蒙図彙』「蒙古」「肅慎」の図像が『三才図会』から影響を受けたことを明らかにし<sup>6)</sup>、勝又氏は、『訓蒙図彙』「呂宋」「天竺」「長臂」「長脚」の図像の情報源が『三才図会』であると指摘された<sup>7)</sup>。また、海野一隆氏は「凡例」に掲出されない正保二年（一六四五）刊『万国総図・万国人物図』の人物図が、『訓蒙図彙』の人物図に影響を与えたことを論じられた<sup>8)</sup>。

「諸家の本草の図説」は特定されない種々の本草書をさすと見られるが、『本草綱目』の図像が『訓蒙図彙』に与えた影響について、上野益三氏と勝又氏の指摘がある。上野氏は、『訓蒙図彙』の図像について、次のように述べられている。

図は『本草綱目』その他の中国の書に載せた図の模刻も少なからずあるが、全体としてよく統一されて整然としている<sup>9)</sup>。

勝又氏は「水母」「猩々」の二図と『本草綱目』の当該図の類似性を指摘し、

次のように述べられた。

また、凡例に載るもの以外でも、挿絵の参考とした書物は少なくなかったと思われる。例えば『訓蒙図彙』巻一四「龍魚」部「水母」の図は、『三才図会』の同一項の図画とはかなりかけ離れたものだが、明の李時珍編『本草綱目』に付された図「本草綱目図」の同一項と形状が酷似するばかりか、水母の下に小蝦を配するという構図までも類似している。ほかにも、巻一二「畜獸」部の「猩々」図は、黒い毛で覆われた身体や、片手を横に張り出したポーズ、正面を向いた顔などが特徴的だが、これも『本草綱目』の図に類似することが一目瞭然である。このように『本草綱目』の図などは『訓蒙図彙』に影響を与えた書の一つと考えて良いのではないだろうか<sup>10)</sup>。

このように、『訓蒙図彙』の図像と『本草綱目』の図像との関連は、先学によってすでに指摘されているが、『訓蒙図彙』①寛文版本が、『本草綱目』のどの系統の版本を参看したのかは、まだ論じられていない。そこで、本稿では、複数の版本の図像を比較検討して、『訓蒙図彙』①寛文版本が『本草綱目』のどの系統の版本を参看したのかを明らかにしたい。

## 二、『本草綱目』和刻本の図像の二系統

明・李時珍撰『本草綱目』は十六部六〇類一八九二項目からなる中国の本草書の集大成である。渡邊幸三氏は、『本草綱目』明代の版本および『本草綱目』和刻本の系統を整理された。同氏によれば、明代に刊行された版本のうち、代表的なものは、次の三種である<sup>11)</sup>。

明・万曆二四年（一五九六）刊、初版本「金陵本」

明・万曆三十一年（一六〇三）刊、校訂本「江西本」

明・崇禎十三年（一六四〇）刊、校訂本「武林錢衙本」

杉本つとむ氏は、これらの三種の版本が江戸初期に日本に舶来されたと指摘されている<sup>12)</sup>。

渡邊氏によれば、初版本「金陵本」と、これを継承した「江西本」の附図

(図像) が粗拙であるのに対して、「武林錢銜本」の附図ははるかに写実的であるという。「武林錢銜本」は、錢蔚起が「江西本」を全訂し、特に『本草綱目』の図像を描き直し、これを上・中・下三巻に分けて改刻したものである。そして、『訓蒙図彙』①寛文版本刊行の前後に、次の四種の『本草綱目』和刻本が版行されている<sup>13)</sup>。

- ①寛永十四年(一六三七)『本草綱目』版本
- ②承応二年(一六五三)『本草綱目』版本
- ③万治二年(一六五九)『本草綱目』版本
- ①寛文六年(一六六六)『訓蒙図彙』刊行
- ④寛文九年(一六六九)『本草綱目』版本

そこで、これら『本草綱目』和刻本の図像と『訓蒙図彙』①寛文版本の図像を比較検討していく。ただし、③万治二年版本は確認することができなかった。この③万治二年版本は、渡邊氏によれば、「武林錢銜本」を校訂加訓した重刻である<sup>14)</sup>。

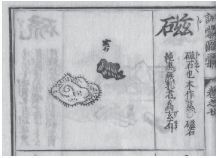







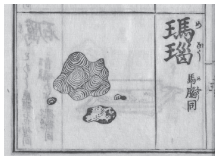




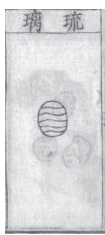


同氏によれば、『本草綱目』最初の和刻本①寛永十四年版本は、「江西本」系統の訓点本を祖本とする。②承応二年版本は、本文は①寛永十四年版本の版本をそのまま用いるものの、図像は①寛永版本の図像を廃し、写実的な「武林錢銜本」の図像に入れ替えている④寛文九年版本は③万治二年版本の版本を校改したものである<sup>15)</sup>。つまり、①寛永十四年版本は「江西本」系統の図像を、②承応二年版本、③万治二年版本、④寛文九年版本の図像は、「武林錢銜本」の図像を採用した。

『訓蒙図彙』①寛文版本全巻一四八四項目の図像と『本草綱目』和刻本①②④の図像すべてを比較対照し、ほぼ一致する十八の図像を抽出した。

表1は、これら『訓蒙図彙』①寛文版本所収の十八の図像を基準として、『本草綱目』①寛永十四年版本、②承応二年版本、④寛文九年版本を対照して示したものである<sup>16)</sup>。

まず、表1にあげた『本草綱目』和刻本①②④の十八の図像を比較して、『本草綱目』和刻本の図像の系統を検討したところ、『本草綱目』和刻本①②

表1 『訓蒙図彙』①寛文版本と『本草綱目』和刻本②④の一致

所在	見出	『訓蒙図彙』 ①寛文 版本	『本草綱目』 ①寛永十四年 版本	『本草綱目』 ②承応二年 版本	『本草綱目』 ④寛文九年 版本
卷七・宝貨	①磁				
	②玻璃				
	③瑪瑙				
	④瑠璃				

卷七・宝貨	⑤ 玕琅青				
	⑥ 水精				
	⑦ 緑青				
	⑧ 石灰				
	⑨ 豹				
卷十二・畜獸					



卷十二・畜獸	①鹿				
	②兔				
卷十七・菜蔬	③薯蕷				
	④蒟蒻				
卷十八・果麻	⑤松子				

卷十八・果蔬	④甘蔗				
	⑨胡椒				
卷二〇・花草	⑩懷香				
	⑪紫草				

④の図像について、次のことが確認される。

第一に、『本草綱目』①の図像は簡略である。一方、それと異なり、『本草綱目』②④の図像は、はるかに精緻である。なお、『本草綱目』①の図柄は、全体的には②④と異なるが、k「兎」、①「薯蕷」、m「商陸」、p「胡椒」、

④「藿香」の五項目は、『本草綱目』①の図が、ある程度②④と類似する。

第二に、『本草綱目』②と④の図像は完全に一致している。

以上のことから、『訓蒙図彙』①寛文版本成立前後の『本草綱目』四種の和刻本の図像の典拠は、次のとおりであった。

①寛永十四年（一六三七）『本草綱目』版本：「江西本」系統の図像を採用

②承応二年（一六五三）『本草綱目』版本：「武林錢衙本」の図像を採用

③万治二年（一六五九）『本草綱目』版本：「武林錢衙本」の図像を採用

①寛文六年（一六六六）『訓蒙図彙』刊行

④寛文九年（一六六九）『本草綱目』版本：「武林錢衙本」の図像を採用

これによって、『本草綱目』和刻本①～④の図像には、次の二つの系統があることが確認された。A系統・B系統と呼び名をつけ、図示すると、次のようになる。

A系統：①寛永十四年版本の図像

B系統：②承応二年刊本の図像－③万治二年版本の図像－④寛文九年版本の図像

### 三、『訓蒙図彙』①寛文版本が参看した『本草綱目』版本の系統

つぎに、『訓蒙図彙』①寛文版本は、『本草綱目』のどの版本の図像を参看したのかを考察する。表1にあげた『訓蒙図彙』①寛文版本の十八の図像を『本草綱目』①②④と対照すると、次のことが確認される。

先述のとおり、k「兔」、l「薯蕷」、m「商陸」、p「胡椒」、q「藿香」の五項目は、『本草綱目』A系統①の図柄が、B系統②④とある程度類似する。これらの五項目について、『訓蒙図彙』①寛文版本の図柄が、B系統②④とほぼ一致し、A系統①ともある程度類似するが、A系統①との類似度より、B系統②④との類似度が一層高い。

また、『訓蒙図彙』①寛文版本の図像は、全体的には、『本草綱目』A系統①と異なり、B系統②④とほぼ一致する。つまり、『訓蒙図彙』①寛文版本の図柄が、『本草綱目』B系統とほぼ一致している。そのため、『訓蒙図彙』

①寛文版本は、『本草綱目』B系統の図像を引用したと考えられる。

『本草綱目』B系統②③④の刊行年は、次のとおりである。

②承応二年（一六五三）『本草綱目』版本

③万治二年（一六五九）『本草綱目』版本

①寛文六年（一六六六）『訓蒙図彙』刊行

④寛文九年（一六六九）『本草綱目』版本

むろん、『訓蒙図彙』①寛文版本は、『本草綱目』④を参看した可能性がなく、『本草綱目』②、③のいずれかの図像を参看したと考えられる。『本草綱目』②③の合称を、仮に『本草綱目』承応・万治系統版本と呼ぶ。言い換えれば、『訓蒙図彙』①寛文版本の図像は、『本草綱目』承応・万治系統版本の図像を参看し、踏襲したのである。

『訓蒙図彙』①寛文版本が引用した図像は鉱物、動物、植物を含み、十八におよぶ。そのうち、巻七「宝貨」にある、装飾がつけられた④「瑠璃」、台座がつけられた⑥「玻璃」と⑦「琅玕」の構図等を、『訓蒙図彙』①寛文版本が踏襲したことが注目される。

## むすび

以上、渡邊氏の諸本研究を踏まえた上で、『訓蒙図彙』①寛文版本の一四八四の図像から、『本草綱目』とほぼ一致する十八項目の図像を抽出し、『本草綱目』の和刻本三種を比較検討した結果、次のことが確認された。

第一に、『訓蒙図彙』①寛文版本成立前後に刊行された『本草綱目』和刻本四種の図像は、次の二つの系統に分けられる。

A系統：①寛永十四年版本の図像

B系統：②承応二年刊本の図像—③万治二年版本の図像—④寛文九年版本の図像

第二に、『訓蒙図彙』①寛文版本の十八の図像は、『本草綱目』承応・万治系統版本の鉱物、動物、植物の図像を踏襲している。

なお、本稿では、『本草綱目』万治二年版本を確認できなかったため、今

後の課題としたい。

## 注

- 1) 杉本勲『近世実学史の研究』（吉川弘文館、一九六二年三月）。
- 2) 木村陽二郎「中村惕斎の訓蒙図彙について」（『教養学科紀要』第五巻、一九七三年三月）。勝又基「江戸の百科事典を読む—『訓蒙図彙』の変遷」（『月刊しにか』第十一巻、第三号、二〇〇〇年三月）。  
小林祥次郎氏『江戸のイラスト辞典 訓蒙図彙』（勉誠出版、二一〇二年十月）によれば、寛文六年版本を縮刷した再版寛文八年（一六六八）刊『新刻訓蒙図彙』二〇巻等がある。  
なお、本稿では、『本草綱目』の版本に①②③④という記号を使うため、便宜上『訓蒙図彙』の版本も①②③という記号を使い、区別をつける。
- 3) 拙稿「『訓蒙図彙』と『本草綱目』—寛文版本の成立をめぐって—」（『外国語学会誌』第四八号、二〇一九年三月刊行予定）。
- 4) 上野益三『明治前日本生物学史』（日本学術振興会、一九六〇年十一月）。
- 5) 『訓蒙図彙』の引用は、国会国立図書館蔵寛文六年（一六六六）山形屋版本（一一七—一八）に拠る。引用に際して、通行字体に改めた。
- 6) 杉本つとむ「解説」（『訓蒙図彙』早稲田大学出版部、一九七五年七月）。
- 7) 勝又基「絵入り百科事典の工夫—『訓蒙図彙』と『和漢三才図会』」（『教養の浸透—江戸の出版文化という回路』勉誠出版、二〇一三年十一月）。
- 8) 海野一隆「江戸時代刊行の東洋系民族図譜の嚆矢」（『日本古書通信』第八九六号、二〇〇四年三月）。
- 9) 注4) の前掲書。
- 10) 勝又基「『訓蒙図彙』解題」（『江戸時代図説百科 訓蒙図彙の世界』、大空社、二〇〇二年十二月）。
- 11) 渡邊幸三「李時珍の本草綱目とその版本」（『東洋史研究』第十二巻第四号、一九五三年六月、東洋史研究会）。岡西為人『本草概説』（創元社、一九七七年十二月）。
- 12) 杉本つとむ『日本本草学の世界』（八坂書房、二〇一一年九月）。

13) 注 11) の渡邊論文。

14) 注 11) の渡邊論文。

15) 注 11) の渡邊論文。

16) 使用テキストは次のとおりである。

国会国立図書館所蔵『本草綱目』寛永十四年版本〈特一―三〇二四〉。

国会国立図書館所蔵『本草綱目』承応二年版本〈特一―八六二〉。

国会国立図書館所蔵『本草綱目』寛文九年版本〈特一―八九五〉。